

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 JAPAN



阿佐倉日記第三編叙

明治三十一年十一月一日

一日有客詰余曰夫無根之稗史小說雖有勸懲之意或假狂言綺語及巷頭世間之話柄而競新奇矣述怪異矣以偽妄實之俚俗輩歡娛焉君子之所不取也予遊文辭之間奚不識道之所以為道乎余對之曰子所為道者何也仁義禮智固道也余所著之冊子無不據

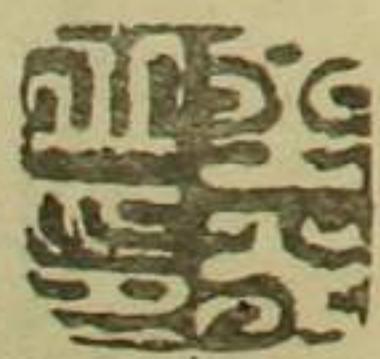
門號卷  
遠  
P83  
11

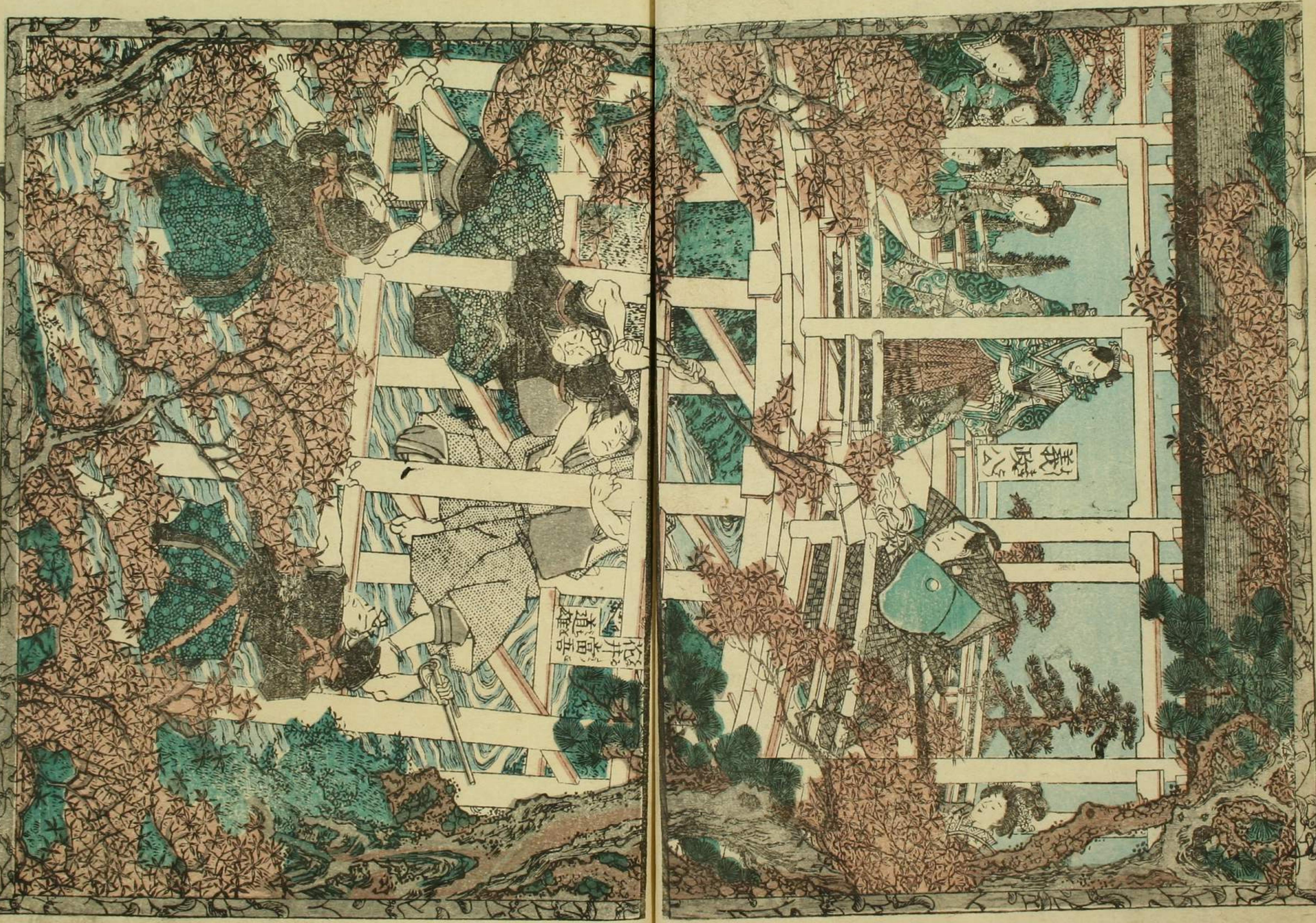
仁與義而忠孝亦存于其中焉善惡邪正聚散離合使讀者不飽且以繡像補佐之以甘言治心疾焉如彼酷吏佞謀之徒與忠貞智臣相反以可觀矣嘗其文辭之鄙俚猥雜者為幼童穉女而已幼童多不識於漢字穉女多不解於倭語是以雖有歷史通鑑紫女源語清女春曙頗微妙要不若干只一日之戲場

矣余輩綴稗史之本意彼與雜劇奚為異乎悉皆使兒童勸於善懲於惡之一端也雖鄙君子野人野人亦有微功也客唯唯而笑而去焉故以此言換序語云

昔嘉永七歲次甲寅重陽日

松亭山人題并書





國家黨

平治

糸則賊

葉間

附佐倉三編卷之一

花井當吾<sub>タチコ</sub>渾家<sub>ツヌカ</sub>於千代





卷第一	阿佐倉の郷入門をと噪め	怪異と祓て佞臣顛倒し
卷第二	當五口三條の旅舎ふ未ほ	當五口三個小密計と告る
卷第三	豺狼威小暮。花洛の館	舊狸怨と逐る篠原の旅寓
卷第四	苛政と恐れ。農民故々と退。	於千代ノ勇氣蘭と拯ふ
卷第五	忠藏等知縣ふ願書と捧ぐ	勧や小因て當吾故々小卦く
卷第六	宅平の羨心簿と断離。	於千代の言良人の心國うじ
卷第七	當吾將軍家訴の状と献。	佞臣權と握て善者と鞠問を
卷第八	義者刑ふ遭或ハ自殺を	鐵牛の羨若輝児と救ふ
卷第九	正光亡靈の為小狂亂に	亡靈竟小讐と報ふ
卷第十尾	積不善の除殃表門と喪	善政肇めて至り万民耽樂ひ

## 忠勇阿佐倉日記第三編卷之壹

東都 松亭金水編次

第一回 阿佐倉の郷入門をと噪め

経ふりそく。國家將ふ興らんとモる所。必預祥あり。國家將ふ亡んとする時ハ必妖孽す。著者龜ふ見ハと四轍ある。徳福の持ふ至ら企す。善必こうこととある。不善必こうことをとある。聖者の金を宜らう。甲賀彈正を來し。正光ハ昌の正覺え他ふ異れて。一門全盛る。けれども。かの堅田不滅びる。叔父時氏の怨魂の所薦ふぞ。やあくとぞ。勝山ふ心せ蕩き。藩奉大ふ起きて。財用不足するふ身。雀部汝謙太翁等の佞臣もく

もの虚と窺ひて。采利と計て。我主を尊ぶる。アホ前で民服せば。遂に勅礼  
の禮と角く。且々亡びをもる所へおもびく。妙薈すありのあり。再説於我代。辛  
うど。門外へ遣て出まば。蓑笠を身に。獵獵然と。幻裡て手をも。曲晨夫们を  
見る。うう小腰と屋や。花卉の令圍締あくて。在して。うそそそ。腰力も。可い。泰山に  
處。毫毛刀。称他の経緯と身ぶりうけと。この斬生を夷き。あん身へ更に教へ  
た。彼兒稚兒を一個。心懶む遙と。衣を登り。登り。書運ありと定め。  
腰て。よもく。おもやう。泰山の工へのひき。女の方をまく。机のどきと。度不惠を  
稟う。所がお祝あんの身を背う。ことし後日の罪咎。不あらがる。まよ草  
絆。在んへ人の度あまを。とかと。吾ゆか。既え。己が心も足下ふ。肩と。肩思  
の族七八人。まが長より。於キ代刀移て。遂に。衣を登り。一臂の勞を僕ん

と。支。よう。主。總津。次時の間。不。六十。傍人。大。庭。不。登。り。小。ひ。の。安東。を。祕。從  
て。コ。ネ。不。用。章。て。和。女。弟。大。門。あ。う。並。出。ら。と。の。お。仰。あ。る。モ。そ。  
か。も。と。ん。と。あ。り。ト。不。用。章。て。和。女。弟。大。門。あ。う。並。出。ら。と。の。お。仰。あ。る。モ。そ。  
そ。れ。を。力。私。と。原。ひ。の。く。佐。け。ら。と。う。身。を。來。き。と。異。口。言。高。不。向。か。る。能。半  
代。ハ。確。る。胸。を。卸。よ。う。眼。不。潤。む。涙。と。拭。ひ。ま。そ。り。足。下。等。お。志。難。す。を  
悦。う。と。も。言。葉。み。の。尽。と。と。だ。泰山。グ。安。身。を。あ。る。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
ま。と。室。の。あ。と。び。と。  
と。

夢へありが。と改て聲く衆人們。當た刀私ハ死ゆよと先日未よ直して  
岩疊化す。春の天行感冒。病ぬ人々を折ざり。嘯一ツのせめん。腕く  
彼世僅まる。薦房と至福ニテ。上ふ。安往那度。折檣不會セリ  
リ。アリ。五枚と。をまた大蘭と。詮め。頬伸み。官吏厭等。取り奉事  
莊屋の敵。生て未ら。備僕僕。寄て。蒐つ。を殺す。首と。用。あ。士別れ。臣  
被。此方の腹。う。と。僕門内と。見。眼。と。更。お退く。毛。と。千代ハ  
手と。舉。毛。と。足下等。ダ。その志。ハ。腰。う。と。日。泰山。刀私。が。定。う  
か。た。根。と。ひ。ま。と。妙。と。ト。や。実。の。と。も。也。官吏。ハ。大。張。と。頗。主。と。  
あ。そ。の。後。日。の。後。足。下。を。ダ。女。房。み。ま。を。い。う。う。罪。不。遭。ふ。の。事。を。仄。ま。く  
在。在。と。と。モ。あ。ち。よ。ど。の。さ。ナ。ゲ。ま。ま。と。上。ま。ま。ん。と。る。人。と。  
の。場。を。還。り。そ。と。止。む。も。可。ぞ。於。千。代。刀私。う。得。女。房。を。弱。い。と。張。無。食。腹

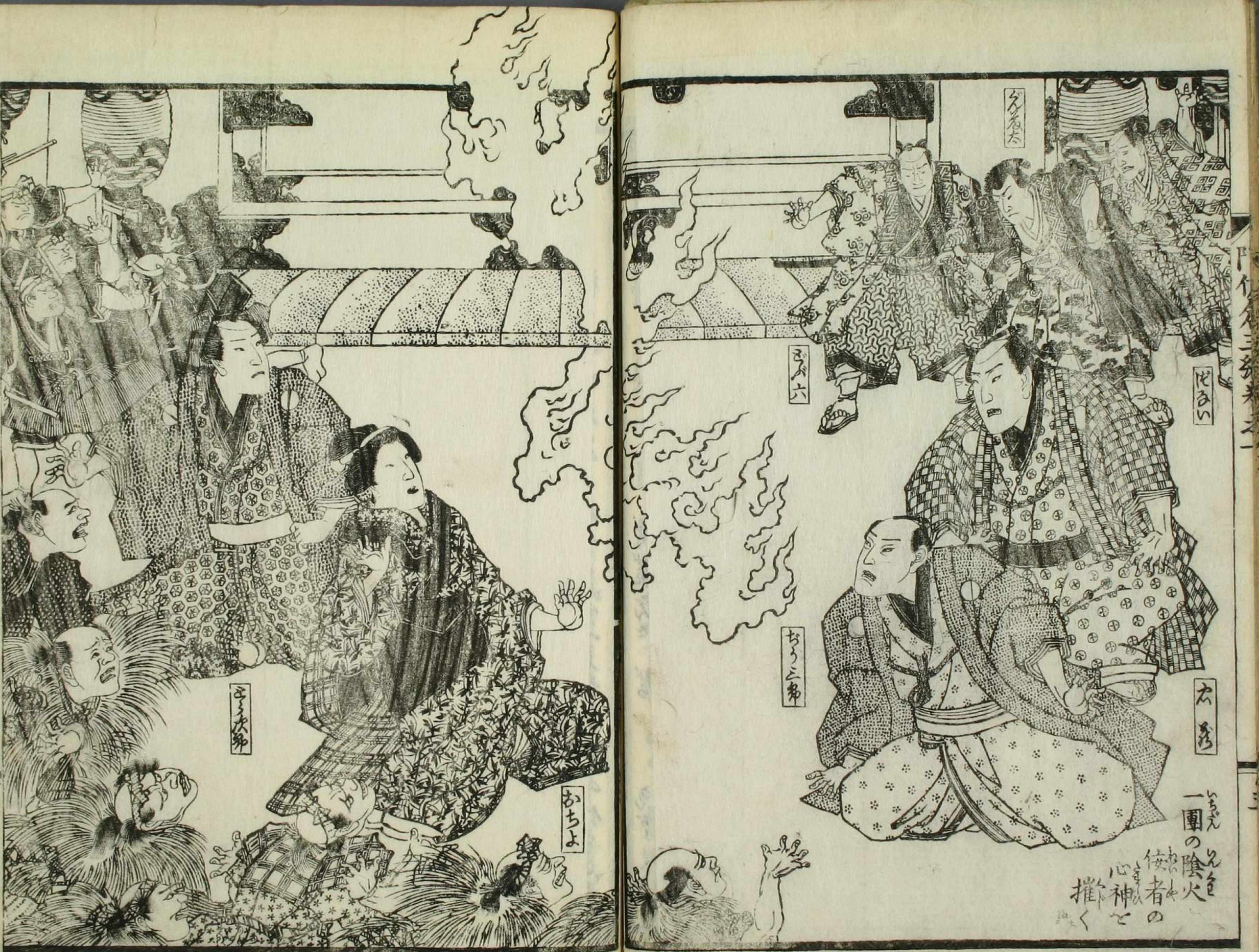
日の。終。の。あ。と。も。看。る。と。吾。们。グ。私。合。と。も。憑。む。莊。屋。と。殺。ま。と。そ。の。所  
容。と。と。引。て。性。ま。う。官。吏。と。も。出。愈。く。と。四。下。不。響。き。く。變。う。り。ま。を。四。言。  
折。え。喘。と。弛。ま。く。と。別。人。あ。く。千。葉。の。忠。高。須。の。虎。次。郎。引  
續。で。勝。間。田。の。重。三。郎。ハ。難。人。們。七。人。と。ひ。き。連。て。ね。と。も。ひ。な。だ。多。人。們  
が。ま。え。不。立。塞。空。被。ま。と。廣。げ。と。お。強。め。血。迷。ひ。る。二。戸。每。の。人。と。ま。筋  
方。と。お。お。う。と。君。の。表。ひ。門。尾。翁。と。あ。る。と。命。ハ。亡。ぞ。夙。不。笑。ハ。於。千。代  
刀私。と。遂。ま。と。來。こ。の。鳴。殊。勝。あ。ま。と。と。り。捨。あ。と。罪。の。上。全。ま。と。思  
と。吾。们。三。個。の。ひ。あ。と。せ。あ。と。つ。ま。だ。案。不。差。ひ。ま。と。豫。内。の。の。の。奉。助  
下。ま。く。と。制。さ。と。と。赤。面。と。と。裏。門。の。扉。を。破。と。押。因。て。ま。う。一。番。不。高  
桃。灯。と。七。ツ。八。ツ。左。右。お。並。べ。狩。卷。四。天。不。見。と。固。る。十。多。早。索。巍。め。く。財

あら ここ あいざん  
うち張る夥兵の大勢。をりと立ち止る。次ふれた蘭草養太翁の筆端  
の二個が。つまむ野羽猿野袴。その行轍と御教ひ。捨てて審處する爲  
あらず農人們の筋がある。さういふと新縣へ渡る。をまく精揮は仕事にとど  
せんとす。かくある。あそぶ。さういふと外を囁きをす。彼の外なる不商ひ。肉と  
骨と水桶捕重き刑罰みがかりとぞ。然て上の仁義はある。殊不欲む  
逸と水桶捕重き刑罰みがかりとぞ。然て上の仁義はある。殊不欲む  
羣昧の小民一文不知の族ある。まことに老ふ唆唆うと。何の思ひもくまると  
むべ。もの大罪で赦さる。是悔ひるゝ。金中の魚の大海へ放るが如。有難く存  
在。上を憎むる。ある。思ひ下の邑役銀令小底。ある。謂多々。  
う縫立とあらと。速ト止む。また計らふ。務自ら。却て羣民もと作  
をまうあへず。然て領主お心厚を歎え。その罪方死不盡。ま未昇。

小幡おがき。それを黙々と搦め捕まると指揮ふものと押さう機駿兵止  
ちうごう まちぎ りあて つ そト  
やも忠秀は跡上へ落あとる。こゝへゆるよもね。山察もと紫ひのま  
みせう  
不肖あまびの在下筆。阿佐倉の郷の邑長と務むうちふやき程の善め存  
とれうらわよこくみ ども うよ  
よむあり。何を以て小民ともと疎う候べて。天本齋一を領主へ転属の事令  
ととうさじと う  
をもひ。先秦ば遠程ふぞむひへ。まとまととゆひづんば儀の脣門らす。素すのれを額  
ぐり。き ひと ことトロウぢうざくら、りくとゆ いまわうがく  
着べ次本控へ。虎渓翁。重三翁も隠共か。今中等秀うまと連ま。竹と巻き  
まく ぬえ くまき  
物と遠恨ふ。所嘆やまく。樂等の堂宇坐つて組下ゆ。其不患ことを憂ひ。あ  
まく まく まく まく  
義を送田を。樂等の堂宇坐つて組下ゆ。其不患ことを憂ひ。あ  
まく まく まく まく  
きをと留 あま  
まく まく まく まく  
と。兩親の如くも人の聲よりを愁心辭を以て歸らる。其食を主むね。聞  
きまく まく まく まく  
ふ業やせり。これに當吾に用全の才量をして他を以て。樂等の家のみの陣を

の。用兵へと老も愚ら後へ。終ひては心懐ひとん。然まに吾們連通て引居  
さんと諭せし者ひの者ともと遂下うど。内刺遙不表ひとが路あく得遂事。  
斯の時宜ふはあ。君達の明智とす。察り多く分明あらん。且度在處に囚ひる。  
花落昌吉は下僕等を多めに遣し。遣お上系きく。歎き故へんとなぜうど  
上の意を憚りそ。教目を然上りて處ふ。渠等既不あとと。故今を心中へ下僕等  
ゆきと廢まこと。頃々君達の心熟成を。故郷へ飯さうむわゆ。生  
世との慈恩あり。心を原心ひ奉つ。と平狀て演りうと。董義たゞめの故だ。  
嗟小旅喧その云解を理あり。或れぬ事あひと。清賑とりて初るをまじ。本末大  
相違せり。阿佐奈の知縣より。注進狀の様あ。郷中頻ア不務もふよ。至  
取徳うて人殺を向ふ。農民们で我意不慕。一向上の令不應せん。下

月をお擱す。或ひ田溝へうち着て。稼藉云術不絶毛とある。汝等既ふ上ふ  
あまべ。時月を候さばとまづ。嘆め。耕鑿を做をべき。うつまのうい食をまそ  
遠くのみ。地へ来る者の跡逐て。従らんと。更かびて理ふあくび。想ふ。汝等  
内ふ。上と恨む。王意ありて。農民们とりひ食。一面上籍を噪げて。升と築む  
といひ。上名うて。誇りうまくの人殺を引連乳坊をえん。ひき。然あく。不勞  
儀り連て。おはとをまづ。嘆め。妙とひの意うて。分解ひうつ。不何  
是ふをと。道まぬ罪斜。者共そや。搦めよ。と指揮ふま。も取撃夥兵卒  
代ハ筒うち。傍ふ瀬を。變す。も坐ま。在る。此に。やと。身と起。て。夥兵の方ふ  
走。近づき。遂に。笑秋。る。人に。う。畢。妻泰山の危難と。故ひ。なく。て。妻  
あ。笑て。是もう多くの郷人妻ふ力を副んと。誇。逐姪。て。上系。を。と。笑う。下



わゝとくら ちんド りぞく  
あと ちづくと と そ  
村長们ひうみう陰まやおまえらんとまことの説を逐続ひふ事あま母トお計  
らひふて全く上ときある。赤心うつをお察トめのを。お達は縄を掛くま  
り。更不禮とも見え竹へ。その元と推モキム。罪ハ妻の方あるのみ。  
まだ妾を捕めひて。乃ノ人故きく飯テタ。に頗きい夫不無一私うど  
ききよ。 え  
及ぶ。よく船をまよべ。と身と抱て船をまご。葦着たへゆと等一ひふや  
り。 あうび やうこうえん きゆ  
及ぶ遙圓の発政する放るまご。捕め捕へ勿薦めう。争はう。格擇を要し數  
二 あうこうえん やうせ  
兵ども如心渴よ。と駿眼をまご。羨り。と鞍年代を失度。お捕めをとく。當  
ときづきへ。そがへ あとう  
下國門へ遠まく。をぎをと推止め。駿兵ども卒示みせ。この女房の五口。當  
せんそかもやくる そそ  
先刻を殺死へまさ。主の一堵の腰を。おが宅へ格擇と。嚴命うけ  
どみど とくろて み  
女房のまご。懲ふすと。おまきを。あちよ て と

引まんとひあゆて井と井六がうち拂つて國内刀兵こまく近も不審手方をふ  
りあむ用事まし。門あと噪び奴们僕傳へあげて乳明せひと上意をま  
めりうさ。あ女とば渢坂地の頃いとひ沙汰の存せぬ。もう一別殿は細  
うあつてね。その秋波を祐つるを參るを法種國内は細くひ健分  
ら極と。最前隼人うつあす。終緑葉のこの國内が。聲めぞ祝めぞ連珠  
黒。空まとけん。五口う渢家女てともあきと難人か。達本様のノ資と重複  
もまと

衆へよ。うそまじ一段出来をき。また評價と度頃まよもま。するこの  
もようと。云上徹へう女あきと教るお極つて廣くと。主幹金をとまひとおは  
生。ゆ構あるを突除て。亦自於年代がよと犯人を死。或下太蔵筆を奉扇  
と突起へとまひ止め。銀金券のあふれ出せよ。女手をとま處が宅へ移りあく

此異なり。遂に一團練あり。一應丸明をうへて、後は上京の際  
家を倣て元をと殿兵も村長等も金捌めよと指揮おつと。萬國ま  
と絶田の前後左右を身を捲て遁をきくとを積寄。忠義以下の三  
個の考の案外至極の計らひある。心あ深く憤り。就中忠義の性柔弱  
數の力のあらかがる非を。思ふ本様を。命を棄て校老等ふ泡吹せん  
れと左右の拳を握り。候委員とぞを強く預抵せん。吾身をう  
れ多くの人ふ連累さるを程々あらま。義方事う存命を。在す  
君ふ障らん。乞来三世の罪科があるに縛縛の辱を受むこと。竟あ水解  
あべきと。拒む。繰りあひうと。赦念一いつの初うさん殿兵ひよ  
うき。折重う。於干代と俱不四個と捕て。傳へあんとあらわ不測ある。

一陣の怪風糸と吹きまく。草一列絲一弓挑灯。一回ふ消て。其黑暗。され  
と簇くその折し。实ふ百千の雷の鳴震るをと。做して。洪爐太萬。宣  
下う。車轎の如き。陰火の圓炉。赤かるその光。白毫す。目聰明く。要  
時中空不。在と。不。不。忽地元の暗夜。幽。幽下三個。眼ふ。火瘤の  
程ふ。人あて。白眼。う。その凄焉。拘ふ。囁へ。ひ。あ。あ。虎。う。得の天蘭葷  
羨。太。も。渾身戰く。う。不。怖生。噩夢。時。心。も。脹脹。う。や。あ。て。難人  
ふ。言。張。ふ。と。恐。ま。せ。ら。シ。ア。不。今。の。怪。異。ハ。瓶。程。ふ。の。所。為。ふ。あ。だ。  
泰。泰。ふ。被。老。老。も。怨。魂。の。み。す。所。か。う。ん。參。と。強。て。來。等。と。捕。る。奇。刻  
え。す。防。の。祟。主。と。做。て。五。月。蠅。主。ん。今。放。ち。飯。を。と。も。害。と。ま。す。所。引。見  
ど。キ。づ。る。場。美。許。と。と。心。の。看。る。よ。う。後。約。沃。塗。不。潤。と。宿。

かくを患ひて大勢と引惧てま處と退を以て安あ内へ御りて其後先  
えんどうひ。  
三條へ到<sup>モニ</sup>。旅店の某の邸已有り。且上乗の度あり。又ハ旅宿みせる家多  
き。多處へゆきて譚<sup>モニ</sup>。燒<sup>モニ</sup>。倖<sup>モニ</sup>。宵<sup>モニ</sup>。客<sup>モニ</sup>。鮮<sup>モニ</sup>。表座<sup>モニ</sup>。寶<sup>モニ</sup>。奥<sup>モニ</sup>。間<sup>モニ</sup>。  
まき明<sup>モニ</sup>。もうと笑<sup>モニ</sup>。歎<sup>モニ</sup>。あふ一<sup>モニ</sup>。因<sup>モニ</sup>。止<sup>モニ</sup>。宿<sup>モニ</sup>。まく夕<sup>モニ</sup>。廻<sup>モニ</sup>。仕<sup>モニ</sup>。果<sup>モニ</sup>。忠<sup>モニ</sup>。義<sup>モニ</sup>。虎<sup>ト</sup>  
ト<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。ま<sup>モニ</sup>。ら<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。か<sup>モニ</sup>。ち<sup>モニ</sup>。よ<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。ま<sup>モニ</sup>。  
次第重三郎及於千代の四個<sup>モニ</sup>。上の間<sup>モニ</sup>。連切<sup>モニ</sup>。て<sup>モニ</sup>。下<sup>モニ</sup>。辰<sup>モニ</sup>。巳<sup>モニ</sup>。忠<sup>モニ</sup>。義<sup>モニ</sup>。於<sup>モニ</sup>。千代<sup>モニ</sup>  
對<sup>モニ</sup>。そりあす。巡回<sup>モニ</sup>。久<sup>モニ</sup>。身<sup>モニ</sup>。が志<sup>モニ</sup>。透<sup>モニ</sup>。事<sup>モニ</sup>。あ<sup>モニ</sup>。具<sup>モニ</sup>。あ<sup>モニ</sup>。却<sup>モニ</sup>。ね<sup>モニ</sup>。ま<sup>モニ</sup>。漫<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。筒<sup>モニ</sup>。も  
りひて、情<sup>モニ</sup>。を<sup>モニ</sup>。や<sup>モニ</sup>。あ<sup>モニ</sup>。人<sup>モニ</sup>。然<sup>モニ</sup>。而<sup>モニ</sup>。阿<sup>モニ</sup>。佐<sup>モニ</sup>。食<sup>モニ</sup>。の<sup>モニ</sup>。人<sup>モニ</sup>。皆<sup>モニ</sup>。莊<sup>モニ</sup>。屋<sup>モニ</sup>。を<sup>モニ</sup>。殺<sup>モニ</sup>。さ<sup>モニ</sup>。門<sup>モニ</sup>  
や<sup>モニ</sup>。  
容<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。や<sup>モニ</sup>。退<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。西<sup>モニ</sup>。言<sup>モニ</sup>。あ<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。  
一<sup>モニ</sup>。ま<sup>モニ</sup>。ど<sup>モニ</sup>。殺<sup>モニ</sup>。さ<sup>モニ</sup>。う<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。心<sup>モニ</sup>。ふ<sup>モニ</sup>。荒<sup>モニ</sup>。あ<sup>モニ</sup>。ん<sup>モニ</sup>。身<sup>モニ</sup>。室<sup>モニ</sup>。お<sup>モニ</sup>。か<sup>モニ</sup>。り<sup>モニ</sup>。て<sup>モニ</sup>。在<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。向<sup>モニ</sup>。ま<sup>モニ</sup>。そ<sup>モニ</sup>。於<sup>モニ</sup>。千<sup>モニ</sup>  
代<sup>モニ</sup>。吐<sup>モニ</sup>。息<sup>モニ</sup>。物<sup>モニ</sup>。か<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。の<sup>モニ</sup>。知<sup>モニ</sup>。り<sup>モニ</sup>。と<sup>モニ</sup>。日<sup>モニ</sup>。月<sup>モニ</sup>。

命と在ものより先じう。既に質と做して今まを承り代わる。  
あれ ひとめち たうと いもき うへ よ さう  
是れ甚る人實也。と號び所謂也。是れが大人の世を退くお敢ひあ  
あす あす とく  
ドとやく此處あり。もとへんを構えり。隊大將もと櫛もと。堀もと  
いまと いと いと せんく うき  
膳と冷さつ。おて相もとの御の聲あくさく。毛衣大人。ざきの火の内もと  
ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも  
あらんと両側づりと自然もと。手と掛ふ。中身は皮筋。眼と  
ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも  
角を貌と改め。ひまゆり両見の象形よ差ひど。嘸慙やかに井の大入渠  
ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも  
ちがはず手あ蘭とも。死りぬひよ疑ひ。如きをどく當吾と象へ。既あ  
ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも ひも  
兄弟の音と繰べば。吾為ふも猶父より。俱か天と氣つて。敵の敵と一劍  
あんあん あく  
うちとも。安穩あ措へてあまを。乞今より被處へゆ。倭人們を一太刀帳え  
あんとも あんとも  
跡のあごひ足下们よ見あ計らひゆ。とひひに傍る腰と櫛把て先  
もと

とての容死も沛公の危難と見て樊噲が眼と脇らで牙を噛み  
入んとする威勢也。こどもとて退下ことをえりなし。千鈞重きが遠きを知  
ひて留て千乗の賢兄まづ俟多りふとあり。お何より是下が取扱ひる事  
ぞあり。近曾思ふあたは功あるまや。渠等の輩の輩といふ。虎  
威と狹き高堂不廣也。且それあ屬強び。衆人们も多うふ飲食見下  
す。義理の徑捷也。まことに項王が勇ありとも。之を敵するこもん。繼も  
瘻が身せざり。怨讐あ除せよ。是を志と致そのこと。功とす  
不捨也。吾们こその在事の大人物。才と恩泽と稟き方を。おひま多  
きるこみけど。その及をばうと角き。曉りそ。一朝か身を勤まば。克。思難  
し。とて忠義うち領ふ。いそと不名理う。おまども不肖也。

在下脱小四十步と數て、ひうて血氣の勇氣を卑らん。この之情との虚  
りと仕損せんと陥く。もの悲心へ感附せり。そと保へ密うつて  
善とおままで足下等が心と歌ひ。一端なり。と吾が人骨を供すべ。  
在下今もう被處へ到り。課役の黄金大方の枚ひ。且と支ふつた大商  
者約もお面會せぬ。辯の性する次をあ。勿福内訌の工所へ入お笑す  
べのあらね。一間の程を密終ふ。とおめのまく。此一室へ收入  
候。ま下猶も歎き。掌の中ふあり。とてて虎次郎小膝を近づき。声と低め。娘らの懲りを不意ふ。三  
個の肩を伏並べん。掌の中ふあり。とてて虎次郎小膝を近づき。声と低め。娘らの懲りを不意ふ。三  
とてて良計あり。然まども彼ハ三個。此ハ一個で対應せむ。在下佐捕ま  
す。お手と教へ。お手の人。重三易も放さ。吾の俱お来るべ。大丈

の爲小儲と付ねまつ甲乙のあぐをあらはれ。難波といもんより。二個三  
種わやさの着たりふと萬物こそとへ中身の頭と左たへうち揮す。計  
策究めを極す。ひとと二個のとて歎ひがこそ心を寛げとありせら。三個か  
一ひととて。法の如く上坐す。衆人们左右と護り。振く近寄る。済  
然またとて全く画併きしん。在下一個をふ若どと争ふれま開紙を沙  
らりあり。いそ

羅裡と因て入る人あり。

この畢竟後まん。次の條を續てあつべ

當吾三條の旅舎ふ来る

第二回

當吾三個不密計と告る

當下重處へまち出る。別人からぬ衣井當吾は甲脚伴の旅准備。防王  
金持と後へ脱乗。坐木舟。忠義作め。ひよろ縁が是れと耳を渡さむ。

物ゆひを。於千代の秋よう放とう。此處ふ人の在とて。ひよろ縁が是れ。  
於雪駕初日。金舟。黄金の峠。朝まで當吾の店だつて。の  
人ひととえ廻る。両三四回吐息ゆき。他の巡回の一件。吾們詰め足下達  
の大敵ともいふ。孔明の房の才智もあらば。ことをとて延んうか  
ねどり。凡魚の者の計らひあら達ぐ。うやせられを是。まゆの勢ひを。  
時運のあらじる所ある。往々てお在下ひまき。十五六歳の頃角を。  
まき。ちを。さんけい。あと。あく。ひまき。おおやまき。うち。ひまき。お  
交う。千葉の賢兄が跡を遼て堅田。古錢へ到す。後家冠ふ。終武  
人。あく。あく。いづく。と

士が義あ輩ひき。如此と。と告う。いふあり。然まと。夢すと。憑じ合  
ああ。まき。ちの供ふうち遼て。終て他かも。續と。三年の後。到て災  
もん。かく。こ。う。が。久。え。ざ。あ。き。え。ざ。とも。え。え。え。

害交起すまく。甲賀の水も断絶す。まん。ま下へ放す。俱お安穩あざ

主。今よりそとを避ひ不急ト。吾ハ時氏が冥火魂より。今如何り體體て  
祀らる。お歎びおほひま。後末の教を示しに努と教ふと爲れ  
と。示現の尊名の義あるあトと如ヒト。先祖竹末の逝て舍  
て何方へう生遷へ。災害あればよと心を決めて在つたが果てれ  
よう干七年。もや三年不近づひ。かるた夏の出来ると今更遠くへ  
去らぬ。今まで普全一計らひを。故々激で小多ふあび。先ひ  
父が因とありめやう心を痛め。かと未徳て在る不思ひぞ。竟西個を  
嫁入する。各富士をあまび。娘らひ見をめと立出で。併勢へき亦失法  
へゆき。遠画のと。物價まだ。種人毒ねど呆まを。領主の非禮と福も  
の。いと大枚の黄金あれば。倒達せんとのなりゆ。然どじゆ縁不繫ざ

お義を以て両家を。五百金の禁ひひま。天をも猶憚ひう。一光辱  
まで足下達へ。商譲せをやどひ。被處まうち出破井の茶席ふ委内  
懇ひと。古井深登の盲人兩個。きと商人ともがきの四五個す。祭事  
り。うそせひも焼ひう。凡そ軍家の評定衆。ふ家を清う  
美熟セ。ふを職と空つづき。阿佐念の頃主。甲賀刀称ハ評定衆の  
出立あゆき。祇園涉すのう妓と抱へ花をあらまると。天不祐入  
目が多く。順和の收納是らぬと。多分の課役と掛らす。ふこと再四  
回ふあゆ。民も瘦む。巡回の只常に所と愿ふ。然ひまきとを屢々遣  
き。但夷係らまを。村長等持傳えする田地小離と。山林まをり。活躍す。  
おととまき。豆らと。阿佐倉一郷の大莊屋花井麦をもとす人々と。

召めども非道の行ひ。夫のこゑをぞ東洛まで重き罪人となす。牢  
をうき。つまらさうま。り。ひともり。うま。うつわ  
糞ふ昇あそ。鐵把長脚讚巍やか。人拂つて曳生る。千蓮うな吾们  
え。悲れと歎くもの家族へ。まことに悔れと心ふらうど。後児と心願を失  
ふを。所容をとめて罪う犯はれ。罪あ簡る済ます。かくとも京都の評定  
をも。計らひあやと傍痛くもあきりとせん。連う漢士を贈るよ。吾  
衆う。悔が無せむと。大渾をその牢糞を。眼ち小看う。哀れ身を  
徳るよ。徳の者。日殺と縛ても。愁訴せざまば手と換て東洛へゆきを免  
う。かくも故郷へ歸るも要す。あふ義を陵む。ち城と役宜不就。之に  
と。うらは魯不此處へ来。衛の傍赤風柱が。何佐余の郷の農民等。印壁の  
の内あり。付考。うらが先割の程。かまひ取ると。うらの事も名ひます。

かくそひ此處不富すらん。と来てきけび千葉勝間田高須の哥も在りと  
故ましご入て看るふ。吾父被處で死れと變ひて怒ふ様也。被處へ剣り  
て仇をうが頸を伐並んとの勇也。志のもの極へ骨も髓も肝も筋も<sup>うど</sup>  
身も<sup>から</sup>辱す。慈とじめ勝間田の哥こづ異見のみ思ふ事無<sup>うき</sup>。血も不昇<sup>あ</sup>ま鳴<sup>う</sup>る  
あらず。齧<sup>く</sup>今よう商<sup>さう</sup>徳<sup>とく</sup>みさん。とぞひきゆんと。俱<sup>とも</sup>お前<sup>まへ</sup>千代<sup>よ</sup>が在<sup>ゐ</sup>んと。  
寡<sup>う</sup>すすみ泰山の船<sup>ふね</sup>と救<sup>すく</sup>ひんと。未<sup>ま</sup>すすみん<sup>う</sup>。舟<sup>ふね</sup>の志<sup>し</sup>を致<sup>たま</sup>すの。經<sup>う</sup>  
くき<sup>く</sup>。あり<sup>あ</sup>所<sup>ところ</sup>のとく<sup>とく</sup>も<sup>も</sup>。翁<sup>おきな</sup>きども<sup>も</sup>ま化<sup>か</sup>ふ。新<sup>あら</sup>まうせま繁<sup>しげ</sup>。輕<sup>くわ</sup>く<sup>く</sup>容<sup>ゆ</sup>す  
候<sup>ま</sup>べ。と<sup>と</sup>候<sup>ま</sup>於<sup>お</sup>千代<sup>よ</sup>の流<sup>な</sup>と拂<sup>は</sup>ひ。素<sup>す</sup>一<sup>いつ</sup>のやく泰山に。京<sup>き</sup>洛<sup>らく</sup>へ身<sup>み</sup>を<sup>も</sup>と  
す。身<sup>み</sup>を<sup>も</sup>の怪上<sup>あがみ</sup>。と夜<sup>よ</sup>お修<sup>しゆ</sup>ま<sup>ま</sup>家<sup>いえ</sup>と<sup>と</sup>うち生<sup>う</sup>安東刀<sup>あんとう</sup>穂<sup>ほ</sup>を<sup>を</sup>囃<sup>は</sup>と<sup>と</sup>かを<sup>か</sup>美<sup>う</sup>り<sup>り</sup>。  
一<sup>ひと</sup>處<sup>ところ</sup>。如<sup>ご</sup>此<sup>こ</sup>もあ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>画<sup>か</sup>焼<sup>や</sup>と<sup>と</sup>ある<sup>ある</sup>のと<sup>と</sup>ある<sup>ある</sup>を。洋<sup>よう</sup>幅<sup>はく</sup>圓<sup>えん</sup>内<sup>うち</sup>お<sup>お</sup>説<sup>せつ</sup>べ。箇<sup>か</sup>様<sup>よう</sup>め

うあつと。一什と猿の傍より。忠義の小勝と進め。瓶ふ於年代が送書を  
出る。正と齊一甲し一回より食せ。俱不力と戮さんと准儀の折り知  
縣小も頼度々下用等。十五人あり。純慈き。一人も邑にと點立て  
トと命令を下す。とりへど皆がらぞ下司等をうち倒。且黙りて近寄る。お  
の左右衆。小須屋義代平ひの老分を副て。その後を従むべ。と分隊嚴  
密に。出するふたや間があひて表門へ宿掛する。吾们まよ。そよすく渡る。か  
如些こと。陰火の怪異もて落ゆ。口を掩へてねがこま。妻五日鶯を安果  
て。まき数回歎息。柱下など引邊へ急ぎて。うの地へまく。も安東力移。既  
ひとまわ。彼人固より凶をう。は非分明う。とどひ入らむとある。耽

ふ。僕人等が虎口を離す。閉門の身方とあまま。吾们が萬全を。今  
さきねと陰方。天日のまこと。塔小墜。私ども。いふうと。奸の。陰落  
忠義。安東太久が。かの如く。を。吾们。グ運命。も。焉不竭。と。嘗々。冬。  
と。まき。救圓。歎息。みせ。が。要。あ。て。於。千。代。不。對。ひ。汝。泰山の災。私。寔  
は。本。恩。び。を。救。ひ。ん。と。て。却。と。大。事。不。及。び。る。所謂女賢。くて。牛活損。ふ  
此。あ。ま。と。り。今。ふ。於。て。跡。へ。返。ら。ば。先。素。貌。と。若。人の赤心。更。不。咎。む。と  
あ。あ。く。私。と。你。が。あ。と。立。坐。ま。の。係。る。と。み。も。却。し。思。へ。と。き。面。寔  
あ。う。ん。是。よう。底。の。感。め。へ。と。天。て。不。往。ま。ぐ。故。ふ。你。の。西。三。人。の。鄉。全  
わ。て。家。か。小。瓶。り。千。葉。勝。同。田。そ。ま。く。の。留。守。宅。へ。の。縛。の。朴。と。祥。ふ。草  
生。さ。滝。沢。お。他。へ。の。演。説。ま。と。遡。一。不。ま。下。鄉。人。の。中。心。利。ま。人。信。

らひ伴つて阿佐倉の郷へ歸へり。兎角あるより夜日明け生を豪座  
敷及二階と云歌を展ひう一郷人等一客小起出で上の者専て未至り。  
各同音をあらや。昨夜ハ辛きもの場を研抜け一夜ハ樂か騒ぎあり。  
忘忌もやまぬ長の窮迷このまゝお止へま。今よう再び彼處へ押寄せ。核  
ひねきより頬を看んとそぞい奈何事とほり。ひゞ間の障みを定む。遂  
當吾大人仰げのるふ。とりひゞ候を頬ゑだ。爰吾へす處へ膝摺修せ。蓋  
左夷づく囚と憐とせひて赦へんと。名とよまで來あよ。今より空て感  
謝ふ様を辱め存むべからず。とひどこまゝ毛上の命を徒づひる罪  
とぞ縛めくも足下等りゆか教誨をも。仲々免る事下。終を云  
さば教訴ありこそ。名ゆまき自畢せしも。さまだまづが見せをあく。お絆へ  
まづ教訴ありこそ。名ゆまき自畢せしも。さまだまづが見せをあく。お絆へ

飯らまよ。在下等跡不遺す。課役の黄金と調進して。山井と原久  
のこと。とりひゞ敢ね小農民们財うち張て小膝と進め。當吾が頬を侯  
とうち成ゆ。とよひ近習小檀那の作とす。貴えぬ者も。非の願主す  
課役の金網。教田不及。とぞ。今戸内へ懸難。と。悲き長き計  
ひ矣。已づ山林田畠と他領へ演習。其全額へ吾们式へ預一文。不割  
鉢も。ねその仁心。産業小儀を重ん。寐ても起ても忘しきの如く。匍匐  
あすく。擣児ど。その種と作ぐる。船食はまく。やう。罪被。室  
やその恩義。お慶でやへり。各とお運まうて。英金網にて宣令。故  
郷ふ在てま。營ひゞ至大金の。ごと。かて調入。御あらんや。是を縛ひ  
の吾们。却て邪魔ふ。不を。膳と飯。の。ふ。夫丈の。ま。頬抵て。狀



處所居えも要あけよ。命不復ひえまえりきど。家と弁妻みと指  
き。懲るあを生をまへイ身と罪被るグ情一とそ。大人の安否の分ふあ。  
あらく 阿容みてて何飯らん。よく帰ると安穩か。家族と養ゑべ候ざま  
候。あで慶ふあくとも。彼とう恨み竹とう悔まん。飯まとあぐ候まを  
あ。まなき行無の終仕合とす。錢へ押掛余とのふ有事と定めと往々  
あ。各本何不と祝えます。後不並居る農民们りふれ及ば盡吾刀耕  
ハ。校官吏と名とてう。黄金網てと命をまと生死をあくと老人を弓  
ひき。生を被處不若しません。斤両も卑くその羅羅と枚ふづ恩不報う事。  
ひき。生を弓下忠義と舉て誓く辭  
去未遂ふことをあづ。裳襦折りのむあり。盡下忠義と舉て誓く辭  
去  
まことひゆす。畢竟當吾内が汝達不飯まとあるハ双方の。おお義泰と

思へハア。然ると多く唆倣と。今よう再び館わふ。その志ハ得遂す  
こそ。却て大人不肖吾們ふり。罪一層と倍まる計らひ。終まらへきも猶免さ  
きま。轆轤の泥不息物るゝ。是と智といひや不智とりひや。自と舊と  
しも。思惟せよ。誠めとこそハ今更ふ威勢抜てまと下不居る忠義と義泰お  
對ひ。丈夫も志と奪へまを。渠等は蒙昧ののあきども。その身の安危を  
顧む大人の恩義不報いんも。その心根へにあつ勇あり。まことに此の計らひ裏  
より。誓くも不逞やあ。向ふ立處つて要素不無べく。まことに此の計らひ裏  
まで喰まう方とぞ巻きあ。足下等りづかぬをと。と重三脚と虎次連。  
見えかよひと吹放す。吾も然とぞひ。足當吾内のが心奈何ふとぞ  
あらく。嘗五口の回食て。在下別不所存ふけれど。然らぬと不衰耗と。所知の食

かく大勢。まふ居ての日この是墮去果の折廢不及なん加旗両三個。  
羅を出で愁訴を矣。然るて多人数出張みさば。花黨教誨ともひも  
かけぬ。頸頭とりはまんれど慮までこじりとせて曲辰民们いふ不毛甚  
小檀那のいもき所を理あり。吾们が宗を立んとて即ち邊の障す事  
ば。絶あたのこれ大不害あり。ひとまづ此處を引取へ。然るての邊の針  
らひ大人との奈何を厚障りて救ひあはう安至候。と膝を進めて仰  
う。蓋五口の妻内四名りあくまと袂を展らしが中表修以下三個の  
ひ体巡回の一件賢尼達の不存の奈何か在下熟慮す。愚昧をあざる安  
東大人就不孰良居と改つて。筋骨を抜きつる心地不負てての上の  
事役なまくとろへ紙令りあら頼文をりて訴へたりとゆか候舍。

道ふ横ひそて上不通せば。吾们とよの下の罪人として无理非焉の事  
うのこ敢て詮キ。且生と死が生死の際も於千代が幻不妄と听。お  
夜陰火の怪異より。大方の奈一ねど。ひまごその寔と渴ぼまた。死せ  
里と定ふりひ終。且國許を下司もと或ひに署りお擲せり。矣ふ露  
郷人等が。陽の勢ひあはれど。是吾们が身不放て。罪と獲るの一つそれが。その  
素のあこと脱き難え。是等の奈何不計らんや。と向ひそ三個の朦朧と  
吐息吻や沉呻小睡て。更不詮方を考そきと。回食を他不云敷。後  
下件の農民们一同お首を擡げ。日未起と才智小闇する。花井の小檀那  
ちをう生と。千葉勝間田高須の長の一容不詮方を宣ひ。吾们が頸を

の蟠アするゆく。遅延の夜と失ふのこう。大人を救人の便形のぞ。ヨリバ一

同小鎗へ押近。主廻り生死を決まつて。お東方と立あづきと早椎の若雪  
個。勇みそが唯と見よ。得の長身り槍方。と豚の絶る病人々。  
此方うちが工夫の攻劇剣一匙。益て運試。若き切る癪の蟲。片端かたはし下剥て  
食。異と歎くちらあざむ。重三弟及虎次弟かぶさぶらうと。さまとらう。後さるご立。勅えそもとまどぎ難乳の  
举動。翁のなく小荒立。りよく歎くちら歎あくまち。吾們篤と沉呻くわいして経き  
こきと計えらべけ。まづ你達なまこの被廻ひまわ。その沙汰さわぎと候べ。と表坐裏途  
遠うち渠くわ頻ひん。勇いさもまづ。や礼妨れいぼう不及せきせき。もの実情じつじょうの花井の尖  
人ひと頓救とんきゅう。もとるもとる。以あるゆゑ被奴ひのび。えまえま貞家じんか。附城つきしゆ。太公  
日本ひにに極きわ。跡あとくその日ひと遡さかる者もの。然しかるお送おもて団裸役だんらくえき。年貢高免  
のいの波なみ。おねくお收めり。糞くその代しろ。不残ふぜんせざせざが。もとが名なづけ。

土地とち不居ふする。とありがく。離散りさんと心こころを決せ。とあり。かる底そこ意おものあ。故ゆゑ下  
司つかをつかむ。擲なげり。上ある人ひとを忍しのまず。まで心こころ狂きょう礼れい儀ぎ。ぬき。どく木き不ふあき  
生おき。恩おん義ぎ。忘わす。死死。身みを捨すて。大人おとなを敵かたりんと。看みむ。下しも見みとり。と  
て。ふあり。聖せいの金きん。ええ。へざう。り。かく。火ひ中なか。かも。浦うら。小こ遠とお。五ご吾ご們もん  
死しお。配はいの族ぞく離散りさん。もあ。るべ。う。兔うさぎ。ふ。角つの。急いそ速はや。小こ。障さら  
り。一いつ鄉きょうの隣となり。と。あ。ん。軽くわく思おも。淮くわい。と。膝ひざと額こめかと。擇えら。修しゆせ。と。手てと。替かわ  
り。今いま文ふみ。か。よ。と。沉呻くわい。の。あ。ざ。う。り。間ま。不ふ要よう。五ご口くち。四よ下げ。と。祝のぶま。ハ。一いつ聲こゑ  
低ひく。ゆ。と。の。上う。ハ。と。將軍家しょうぐんけへ。候まわす。を。索さ。や。て。被ひ。う。よ。う。他ほかの。と。よ。と。並ながら  
よ。ま。う。ゆ。ひ。く。す。ゆ。く。さ。く。ま。頃ころ。評ひやく室しつ衆しゆの。上う。お。あ。ざ。く。さ。く。威い。と。怖おの。と。吾われ們もん。が。愿いと。執つか。大だい  
さ。く。ま。と。ま。情じやう。上あ。と。せ。だ。あ。ま。と。勞なぐ。と。更さら。不ふ功こう。と。因いん。て。在あ。下げ。孰な第だい。余よ



ら。仕掛かるとあらず。佛子の腰の三箇條。づきとも最初うぎ  
まど。四五十日のうち後うぎ。右ふもたふも冷方ある。まづ渠蓋を阿佐  
倉へ取とす。貯て計らひ。三個の表の坐敷。往ぬ

忠勇何佐倉日記第三編卷之二

